

『枕草子』における藤原斉信・藤原行成の描き方

飯田悠花

はじめに

『枕草子』には、清少納言が宮仕え生活の中で接してきた数多くの人物が描かれている。その中で清少納言との対人関係を考えてみると、中宮定子・中関白家の人々との主従関係、殿上人・同僚の女房たちとの公私にわたる交渉や交友関係が見られる。『枕草子』に登場する人物をその登場章段数ごとに示すと、次の通りである。

| | |
|-------------------|---------|
| 登場する章段数が3つ以上ある人物 | 章段の数 |
| 中宮 定子 | 48 |
| 天皇系 一条天皇 詮子 | 32 4 |

| | | |
|-----|--|-------|
| 道隆系 | 藤原道隆 藤原伊周 藤原原子・御匣殿 藤原隆円・藤原隆家・藤原道頼 | 34910 |
| 男性 | 藤原斉信 藤原行成・源経房 源成信 藤原実方・源宣方・橘則光・藤原道長 | 3457 |
| 女性 | 藤原重輔女 右近の内侍・藤原忠君女 小兵衛 | 346 |

主君筋の天皇、中宮、藤原道隆・伊周を除くと、藤原齊信・藤原行成・源経房はとりわけ登場回数が多い。中でも齊信・行成は度々重要な場面で主役として登場し、清少納言と個人的に親しく交渉する姿が描かれている。本稿では、清少納言が齊信・行成をどのように評し、どのような交渉をもったのかを考察することで、清少納言の人物評価・人物像を探る。

一 藤原齊信・藤原行成の経歴、登場章段

本章では、齊信・行成の経歴及び『枕草子』における登場章段について整理する。両者の経歴については、『日本古典文学大辞典』及び『枕草子大辞典』に見ることができる。

藤原齊信

【日本古典文学大辞典⁽¹⁾】

藤原道隆・同道長・同頼通の摂関制の機構の中にあつて、天皇と摂関との間の潤滑油役を果たす有能な官僚として活躍。藤原公任・源俊賢・藤原行成とともにいわゆる一条朝時代の四納言の⁽¹⁾に数えられる。当時は漢詩壇の最盛期と称され、多くの専門詩人の排出をみたが、それらの中で高級官人の作詩熱も高く、内裏・道長邸などにおいて盛んに詩会が催され、齊信は行成・公任・藤原有国らとともに⁽²⁾もつとも出席の回数の多い常連になつていた。また当時の朗詠の上手としても知られる。『枕草子』『紫式部日記』に登場する。

【枕草子大辞典⁽²⁾】

太政大臣藤原為光の二男。母は左少将藤原敦敏女。才学に秀で、俊賢、公任、行成とともに一条朝の四納言と称された『十訓抄』『古今著聞集』。天元四年(九八一)従五位下となり、以後順調に官位昇進し、西暦五年(九九四)藏人頭、長徳二年(九九六)参議に任ぜられた。道長に重用され、長保三年(一〇〇一)権中納言、寛弘六年(一〇〇九)権大納言となり、彰子の立后にあたつては中宮大夫に任ぜられている。漢詩人としても優れ、内裏や道長第での詩会への参加は行成に次いで多く、『類聚句題抄』に七種、『本朝麗藻』に五首とられている。

以上から、齊信は次のような人物であつたと見ることが出来る。

- ・ 才学に秀でた有能な官僚で、一条朝の四納言と称されていた
- ・ 漢詩人としても優れ朗詠の名手であつた
- ・ 道長に重用され出世した

藤原行成

【日本古典文学大辞典⁽³⁾】

父義孝が若くして没したので祖父に養育され、天元五年(九八二)に元服。源俊賢の推挙によつて長徳元年(九九五)二十四歳で藏人頭に拔擢されてからは順調に昇進し、長保三年(一〇〇一)には三十歳で参議となつた。この頃から能書として名をなし、長徳五年には新造内裏の紫宸殿と承名門の額を書いて、正三位に叙せられた。藤原道長にも重用され、寛弘四年(一〇〇

○七)には法性寺三昧堂供養にあたり、南門の額を道長、西門の額を行成が揮毫した。寛仁三年(一〇一九)四十八歳で大宰権帥の要職につき、この年、道長の子長家を賀に迎え、道長との縁を深めた。翌年、権大納言に昇進、その位を極めたところから、行成の日記は『権記(ごんき)』と称せられ、書を権跡(ごんせき)とよぶ。この行成の書は、小野道風の書に濃淡・強弱といった新鮮味を加え、より優美な和様を完成させた。その書流は、代々世尊寺流として引き継がれ、小野道風・藤原佐理とともに三蹟の一人としてたたえられた。

【枕草子大辞典⁽⁴⁾】

大江匡房の『続本朝往生伝』には藤原実資・藤原斉信・藤原公任・源俊賢・行成・源扶義・平惟仲・藤原有国とともに有能な公卿とされ、公任・斉信・俊賢とともに一条朝の四納言と並び称せられる。書に長じ前中書王兼明親王・藤原佐理と並び称せられ、権跡と呼ばれて、小野道風の野跡、佐理の佐跡と並んで三蹟と讃えられる。世尊寺流の祖。

以上から、行成は次のような人物であったと見ることが出来る。

- ・有能な官僚で一条朝の四納言と称されていた
- ・能書家として優れ、三蹟の一人として讃えられた
- ・道長に重用された

経歴の似ている二人であるが、中関白家に対する姿勢、道長との関わり方は異なっていた。斉信は、三田村雅子氏⁽⁵⁾から次のような指

摘がなされている。

斉信が、伊周・隆家兄弟の追い落としにあたつて積極的に道長に協力したという事実があったからだと思われるのである。(中略)参議任官の期日長徳二年四月二十四日は、伊周・隆家左遷決定の日でもある。(中略)

伊周・隆家の穴埋めとして登用されたことは、斉信のそれからの兄をも追い越す急激な出世をもたらした一転機でもあったのである。そもそも、伊周・隆家追放の原因となった花山院誤射事件は、斉信の父であった故為光の邸での出来事であり、当の被害者である花山院はスキャンダルを恐れて事件を公表する意図を持たなかったにもかかわらず、道長の手によってこの事件が大々的にとりあげられたのは、為光邸での当事者としての斉信の協力が大きかったためと推察される。

中関白家の没落を決定づけた伊周・隆家配流に斉信が積極的に協力したという事実があったらしいのである。

一方の行成は、秋山氏⁽⁶⁾によって次のような史実が示されている。「大進生昌が家に」(六段)の段が取材した史実は、長保元年(九九九)八月九日のことであるが、その日道長は、この落魄たる中宮行啓を妨害するかのごとく、上達部、殿上人を引き連れて(ちなみに、その中には宰相中将斉信も参加している)、宇治の別邸に出遊した。この時の事情は、権記、小右記などに微してあきらかであるが、行成はひとり奔走してその日の行啓をとに

かく差障なからしめたのである。蔵人頭の重職に任ずるかれとして、これは当然なのかもしれないが、しかし、けっしてないなみの苦衷ではなかったはずでもある。

以上の先行研究から、藤原斉信・藤原行成には次のような違いが見られる。

○斉信は道長を支持する姿勢が顕著であり、中関白家とは敵対する行動をとっていた

○行成は中関白家落飾の時期も中宮定子に対して心を寄せており、疎略には扱っていない

このような二人が『枕草子』内で描かれている時期は、次に示す通りである。⁽⁷⁾

| 章段 | 事件年時 | 殿上人 |
|-------------------|---------------|-----|
| 189 | 正暦5年か | 斉信 |
| 78 | 長徳元年 2月 | 斉信 |
| 道隆没（長徳元年4月） | | |
| 154 | 長徳元年 4・7月 | 斉信 |
| 128 | 長徳元年 9月 | 斉信 |
| 122 | 長徳元年 10月 22日 | 斉信 |
| 79 | 長徳2年 2月 | 斉信 |
| 伊周・隆家配流決定（長徳2年4月） | | |
| 脩子内親王出産（長徳2年12月） | | |
| 伊周ら赦免・召還（長徳3年） | | |
| 46前半 | 長徳3年6月～4年10月 | 行成 |
| 129 | 長徳3年6月～長保元年8月 | 行成 |
| 130 | 長保元年 5月 | 行成 |
| 健康親王出産のため、三条宮へ移御 | | |
| 6 | 長保2年 3月か | 行成 |
| 46後半 | 長保2年 3月か | 行成 |
| 定子没（長保2年12月） | | |

* 斉信は八〇段にも登場するが、推定年時がゆれており、長徳2年6月から9月の清少納言の里居の時期とする説、長徳3年9月頃とする説がある⁽⁸⁾

* 行成は一二六段にも登場するが、推定年時がゆれており、長徳2年とする説、長保元年とする説がある⁽⁹⁾

伊周・隆家配流以降斉信はほとんど描かれなくなり、入れ替わるようにして行成が登場するようになる。斉信が長徳二年四月以降登場しなくなるのは、中関白家と対立するようになり定子後宮から遠のいていったためと考えられる。

ここで注意しておきたいのは、『枕草子』は史実をその事件時とほぼ同時に記録する歴史記録類とは異なり、執筆時が事件時と離れているということである。登場する人物の役職名の矛盾等から、執筆時期は長徳二年四月以降とされている。斉信を記した章段も、伊周・隆家配流後に描かれているのである。

二 藤原斉信・藤原行成への称賛の描写

以上のような経歴をもつ斉信・行成は、『枕草子』においてどのように描かれているのだろうか。本章では、斉信・行成の称賛の描写について見ていく。

斉信は、『枕草子大辞典』⁽¹¹⁾において「常に清少納言の讃美の対象として描かれている」と評されている。岡崎知子氏⁽¹²⁾は斉信への称賛の描写について分析し、

彼のどのような点が清少納言の称賛に価したのであろうか。それは結論的にいって斉信の容姿と朗詠と機智とに関してであった。^(中略)

「枕冊子」にみられる斉信は、容姿端麗な貴公子として清少納言をはじめ中宮方の女房の賞賛の的であった。また彼の巧みな朗詠は清少納言の愛好するところであった。さらに彼の文学的素養と伶俐で周到な性格とに裏づけられた機智は、清少納言の知的な嗜好を満足させたようである。かくて斉信は清少納言にとってまずは理想的な男性像であったようである。

と評している。本稿では容姿について描かれた章段一例、朗詠について描かれた章段一例を扱う。以下、斉信・行成への評価を破線で示す。

*『枕草子』本文の引用はすべて『新日本古典文学大系 25 枕草子』

(渡辺実、岩波書店、1991-01-18) による

【容姿(態度)⁽¹³⁾】

七九段 (P94L3～P96L-5)

梅壺の東面、半蔀あげて、「こゝに」といへば、めでたくてぞあゆみ出たまへる。桜の綾の直衣の、いみじう花どゝと、裏のつやなどもえもいはずきよらなるに、葡萄染のいとこき指貫、藤の折枝おどろ／＼しく職りみだりて、紅の色うちめなど、かゝやくばかりぞ見ゆる。白き、うす色など下にあまたかさなりたり。せばき縁に、かたつかたは下ながら、すこし簾のもとちかうよりみ給へるぞ、まことに絵にかき物語のめでたき事にいひたる、これにこそはとぞ見えたる。(P94L-2)

七九段では全体を通して梅壺での斉信との交渉が描かれており、引用部は個人的に清少納言を訪ねて来た斉信の様子である。斉信に

対する評価の対象と称賛の言葉は次の通りである。

・装束に対して、「えもいはずきよらなる」「かゝやくばかりぞ見ゆる」と評価

・「あゆみ出たまへる」「せばき縁に、かたつかたは下ながら、すこし簾のもとちかうよりみ給へる」などの様子(行動)に對して、「めでたくて」「まことに絵にかき物語のめでたき事にいひたる、これにこそはとぞ見えたる」と評価

【朗詠】

一二八段 (P172L4～P173L-2)

果てて、酒のみ、詩誦しなどするに、頭中将斉信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふことを、うちいだし給へり。詩はた、いみじうめでたし。いかでさはおもひいで給けん。

をはします所にわけまいるほどに、たちいでさせ給て、「めでたしな。いみじう、けふの料にいひたりけることにこそあれ」との給はすれば、「それ啓しにとて、ものみさして、まいり侍つる也。猶いとめでたくこそおぼえ侍つれ」と啓すれば、「まいて、さおぼゆらんかし」とおほせらる。(P172L8)

一二八段では、道隆供養の回想、斉信との親交が描かれており、引用部は道隆供養の後の宴席での斉信の様子である。ここでの評価の対象と称賛の言葉は次の通りである。

・詩の誦じ方、内容が時の雰囲気と合っていることに對し、「いみじうめでたし」「猶いとめでたくこそおぼえ侍つれ」と評価

一方、行成は秋山虔氏⁽¹⁴⁾によって「清少納言の行成に対する傾倒は、

斉信へのそれにおとらない」と評されているのであるが、はっきりと褒める描写がされているのは一二六段、一二九段のみである。

一二六段 (P168L3~P171L1)

そへたる立文には、解文のやうにて、

進上

餅餠一包、

依例進上如件、

別当少納言殿

とて、月日かきて、「任那成行」とて、奥に「このおのこは、みづからまいらむとするを、昼は、かたちわるしとて、まいらぬなめり」と、いみじうおかしげにかひ給へり。(P169L3)

一二六段は行成が餅餠を清少納言に贈った時の話を記した章段である。ここでの評価の対象と称賛の言葉は次の通りである。

・立文に書かれている文字に対して、「いみじうおかし」と評価

一二九段 (P174L2~P176L1)

つとめて、蔵人所の紙屋紙ひきかさねて、「けふはのこりおほかる心ちなんする。夜をとをして、むかし物語もきこえあかさん、とせしを、庭鳥の声にもよほされてなん」といみじう言おほくかき給へる、いとめでたし。(P174L5)

一二九段は清少納言と行成の手紙や和歌のやり取りが描かれている章段である。いこでの評価の対象と称賛の言葉は次の通りである。

・手紙に書かれている文字に対し、「いみじう言おほくかき給へ

る、いとめでたし」

以上、斉信・行成の称賛の描写を見てきた。斉信に用いられる賛辞の描写は、

容姿…言葉で言い表せる程度を超えているという描写（「えもいはずきよなる」）、光を用いた描写（「かゝやくばかりぞ見ゆる」）、絵や物語に仮託した描写（「まことに絵にかき物語のめでたき事にいひたる、これにこそは、とぞ見えたる」）
朗詠…何度も言葉を重ねる描写（「いみじうめでたし」「猶いとめでたくこそおぼえ侍つれ」）

である。ただし、容姿への称賛の描写では、その対象は装束や様子（行動）のみに留まり、気質や心情へは踏み込まれていないという特徴を見ることができる。

一方、行成に用いられる賛辞の描写は、書…「いみじうおかし」「いとめでたし」のみであった。

三 藤原斉信・藤原行成との関係性

称賛の描写に違いが見られた斉信・行成だが、実際には清少納言は彼らとどのように接していたのだろうか。本章では、清少納言と斉信・行成との関係性に焦点をあてていく。以下、斉信・行成の行動・言葉を波線、清少納言の行動を傍線、清少納言の心情描写を二重線で示す。また、内容の変化に従い、適宜丸囲みの数字(①)をふる。

七八段 (P88L.2～P93L.1)

①頭中將の、すぐろなるそらことを聞きて、いみじういひおとし、「なにしに人と思ひほめけん」など、殿上にていみじうなんの給、と聞くにもはづかしけれど、まことならばこそあらめ、をのづから聞きなをし給てん、とわらひてあるに、②黒戸の前などわたるにも、声などするおりは袖をふたぎてつゆ見をこせず、いみじうにくみ給へば、ともかうもいはず、見もいれですぐすに、③二月つごもりがた、いみじう雨ふりてつれづれなるに、御物忌にこもりて、「さすがにさうづしくこそあれ。物やいひやらまし」となんの給、人づかたれど、「世にあらじ」などいらへてあるに、日一日しもに居くらしてまいりたれば、夜のおとぎに入らせ給にけり。 (P88L.2)

(中略)

④「たゞこゝもとに、人伝ならで申べき事なん」といへば、さしいでていふ事、「これ、頭の殿の奉らせたまふ。御返事とく」といふ。いみじくにくみ給に、いかなる文ならん、とおもへど、たゞいまいそぎ見るべきにもあらねば、「去ね、いま聞えん」とて懷にひき入て、なを／＼人の物いふ聞きなどする、⑤すなはち、返きて、「さらば、そのありつる御文を給はりて来」となんおほせらるゝ、とく／＼」といふが、いをの物語なりや、とて見れば、青き薄様にいとよげに書き給へり。心ときめきし

つるさまにもあらざりけり。

蘭省花時錦帳下

と書きて「末はいかに／＼とあるを、いかにかはすべからん。御前おはしまさば御覽ぜさすべきを、これが末を知り顔に、たど／＼しき真名かきたらんも、いと見ぐるし、と思まはすほどもなくせめまどはせば、たゞその奥に炭櫃にきえ炭のあるして、草の庵りをたれかたづねん

と書きつけてとらせつれど又返事もいはず。 (P89L.3)

七八段は、絶縁状態にあった齊信と清少納言が親交をもつきつかけとなったエピソードが記された章段である。①②③では絶縁状態にある齊信と清少納言の様子が描かれており、④以降関係修復のきつかけとなった漢籍の知識と当意即妙の機智による応酬が記されていく。齊信と清少納言の行動を順を追って見ていくと、次の通りである。

①絶縁状態にある齊信と清少納言の様子

齊信、殿上にて清少納言をけなす（「いみじういひおとし、「なにしに人と思ひほめけん」など、殿上にていみじうなんの給」）
↓清少納言、気にしない態度（「まことならばこそあらめ、をのづから聞きなをし給てん、とわらひてある」）

②絶縁状態にある齊信と清少納言の様子

齊信、意識して清少納言を避ける（「声などするおりは袖をふ

たぎてつゆ見をこせず、いみじうにくみ給へ」

↓清少納言、気にしない態度（「ともかうもいはず、見もいれですぐす」）

③清少納言に話しかけようとする斉信

斉信、清少納言を気にかける（「さすがにさうど／＼しくこそあれ。物やいひやらまし」となんの給」）

↓清少納言、気にしない態度（「世にあらじ」などいらへてある」）

④斉信から清少納言へ文が届く

斉信、文を送る（「頭の殿の奉らせたまふ。御返事とく」）

↓清少納言、すぐに返事を出さない（「たゞいまいそぎ見るべきにもあらねば、去ね、いま聞えん」とて懷にひき入て」）

⑤漢籍の知識と当意即妙の機智による応酬

斉信、漢籍の知識を試す問題への返事を再度求める（「蘭省花時錦帳下」と書いて、「末はいかに／＼」とある」）

↓清少納言、『白氏文集』の詩の後半を和歌に変えて返答する（「たゞその奥に炭櫃にきえ炭のあるして、草の庵りをたれかたづねん」と書きつけてとらせつれ」）

*さらなる返しが出来ないほどの、会心の応酬（「返事もいはず」）
①②③では、相手を気にかける行動を起こしているのは常に斉信であり、対する清少納言は全く気にもとめないかのような態度を貫いている。さらに、④では斉信から文が届けられるが清少納言は返事

を出さずに使いを追い返してしまい、⑤で再度返事を求められようやく見る。七八段では、

・清少納言を気にして働きかける斉信

・斉信の行動を気にしないかのような清少納言

が描かれているのである。

一二八段（P172L4～P173L-2）

①わざとよびもいで、あふ所ごとにては、一などが磨を、まことにちかくかたらひ給はぬ。さすがにくしとおもひたるにはあらず、と知りたるを、いとあやしくなんおぼゆる。かばかりとしごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などにあけくれなきおりもあらば、なに事をか思いでにせむ」との給へば、「さらなり。かたかるべきことにもあらぬを、さもあらむのちには、えほめたてまつらざらむが、くちおしきなり。上の御前などにても、役とあづかりてほめきこゆるに、いかでか、たゞおぼせかし。かたわらいたく、心の鬼いできて、いひにく／＼なり侍なん」といへば、②「などで。さる人をしもこそ、妻よりほかに、ほむるたぐひあれ」との給へば、「それがにくからずおぼえばこそあらめ、男も女も、けちかき人おもひ、かたひき、ほめ、人のいさ／＼かあしきことなどいへば、はらだちなどするがわびしうおぼゆる也」といへば、「たのもしげなのことや」との給もいとをかし。（P173L1）

一二八段は、道隆供養の回想に始まり、斉信との親交へと話題が

転じていく。①②では共に、斉信が清少納言に言い寄る姿が描かれている。

① 斉信が清少納言に言い寄る

斉信、より親しい仲になろうと清少納言に言い寄る（「なごか
磨を、まことにちかつかたらし給はぬ」）

↓清少納言、これ以上親密になると褒めることが出来ないとして申し出を断る（「さもあらむのちには、えほめたてまつらざらむが、くちおしきなり」）

② 斉信が清少納言に言い寄る

斉信、反論し再度言い寄る（「なごて。さる人をしもこそ、妻よりほかに、ほむるたぐひあれ」）

↓清少納言、自分は親しい仲になった人を褒めることは憚られるとして再度断る（「男も女も、けちかき人おもひ、かたひき、ほめ、人のいさゝかあしきことなどいへば、はらだちなどするがわびしうおぼゆる也」）

①②共により親密な仲になろうと言い寄るのは斉信であり、清少納言はすでに親しい間柄であることは肯定しつつも二度にわたって斉信の申し出を断っている。一二八段では、

- ・ 清少納言に言い寄る斉信
 - ・ 斉信の申し出を断る清少納言
- が描かれているのである。

藤原行成

四六段（P64L.2～P68L.6）

① いみじう見え聞えて、おかしきすぢなどたてたることはなう、たゞありなるやうなるを、みな人、さのみ知りたるに、なをおくふかき心さまを見しりたれば、「おしなべたらず」など、おまへにも啓し、又、さ知ろしめしたるを、② 「つねに二女はおれをよろこぶ物のために顔づくりす。士はをのれを知る物のために死ぬ」となんいひたる」といひあはせ給ひつゝ、ようしり給くり。（P65L4）

四六段では、行成と清少納言の交友が描かれている。①では行成について清少納言が定子に語る姿が描かれており、②で行成と清少納言との仲について言及される。

① 行成について定子に語る

清少納言、自分のみが奥深いところを知っているとして定子に平凡な人物ではないと進言する（「なをおくふかき心さまを見しりたれ」「おしなべたらず」など、おまへにも啓し」）
↓定子、平凡な人物ではないと承知している（「さ知ろしめしたる」）

② 清少納言と行成で意見が一致する（「いひあはせ給ひ」）

①では、他の女房とは異なり自分のみが行成の奥深いところを知っているとの見解を示し、定子に対し平凡な人物ではないと進言している。この行成を評価する清少納言の言葉を受けて、定子も同意を示し行成を評価する姿勢を見せている。②では『史記』刺客列伝⁽¹⁶⁾

の言葉を持ち出して、お互いが理解し合う仲であったと明言している。四六段では、

- ・ 行成の評判を高める清少納言
 - ・ 理解し合う行成と清少納言
- が描かれているのである。

一二六段 (P168L.3～P171L1)

①頭弁の御もとより、主殿寮、絵などやうなる物を、白き色紙につゝみて、梅のはなの、いみじうさきたるにつけて、持てきたり。絵にやあらんと、いそぎとり入れてみれば、餅餠といふ物を、二つならべてつゝみたるなりけり。そへたる立文には、

解文のやうにて、

進上

餅餠一包、

依例進上如件、

別当少納言殿

とて、月日かきて、「任那成行」とて、奥に「このおのこは、みづからまいらむとするを、昼は、かたちわろしとて、まいらぬなめり」と、いみじうおかしげにかひ給へり。

②御前にまいりて御らんせさすれば、「めでたくもかきたるかな。おかしくしたり」など、ほめさせ給て、解文はとらせ給つ。

(P169L1)

一二六段は、餅餠進上を介した行成との親交が描かれた章段であ

る。①で行成から餅餠が届き、②で清少納言は餅餠に添えられた解文を定子に披露している。

①清少納言のもとへ、行成から餅餠が届く

行成、餅餠に解文を添え清少納言のもとへ贈る（「餅餠といふ物を、二つならべてつゝみたる」「そへたる立文には、解文のやうにて」）

↓清少納言、急いで中を見る（「いそぎとり入れてみれ」）

②清少納言、定子に解文を披露する（「御前にまいりて御らんせさすれ」）

↓定子、行成の字や趣向を褒め召し上げる（「ほめさせ給て、解文はとらせ給つ」）

①では行成から届いた餅餠に対し、中身は何なのだろうかという強い興味を示しすぐに広げる清少納言の姿が描かれている。②では清少納言が解文を披露したことで、定子の褒めの言葉が発せられ召し上げられている。一二六段では、

・ 行成からの贈り物を気にかけてすぐさま対応する清少納言

・ 行成の評判を高める清少納言

が描かれているのである。

以上、斉信・行成の行動と、それに対する清少納言の態度や行動について見てきた。これらを整理すると、『枕草子』における清少納言と斉信・行成の関係については次のような特徴を見ることが出来るのである。

○斉信は清少納言を気にかけて積極的に関わりかけ、姿が描かれるが、それに対して清少納言はまったく気にしないかのような態度を示す。また、親密になろうと言いつつ、寄るを断る。

○行成はお互いを理解し合う姿が描かれ、清少納言も行成の行動を気にかけてすぐさま応答する。また、行成の評判を高める行動をとっている。

結び

多くの表現を用いて讚美し、称賛が示されていたのは斉信であった。しかし『枕草子』内に描かれる斉信・行成の行動や清少納言の態度・関係性を見た時、清少納言が真実氣にかけ、親しみをもって接していたのは行成だったのである。

これは、斉信・行成の当時の身の振り方にも関係していたと思われる。道隆の喪服期定子後宮の周辺を明るく華やかに描くための人材として、清少納言は当時道長権勢下で活躍していた斉信を選んだ。しかし、内面には触れられていない、清少納言からの働きかけが少なく最終的には拒まれる、等から分かるように、中関白家を切り捨てた斉信は心を許す相手にはなりえなかったのである。一方行成は、華やかに賛美して描く対象では無かったものの、清少納言はそのような行成に対し理解を示し、気安さを見せつつも自ら行成の評判を高める行動をとっている。知的応酬を交わすことの出来る相手というだけでなく、定子、ひいては定子後宮を遇する姿勢にも好感を見出していたためである。

注

- (1) 『日本古典文学大辞典 第五巻』(日本古典文学大辞典編集委員会、岩波書店、1984-10-19)
- (2) 岡田潔「主要登場人物解説 藤原斉信」(『枕草子大辞典』枕草子研究会、

勉誠出版、2001-04-01)

(3) 注1に同じ

(4) 山崎正伸「主要登場人物解説 藤原行成」(『枕草子大辞典』枕草子研究会、勉誠出版、2001-04-01)

(5) 『枕草子 表現の論理』(三田村雅子、有精堂、1995-02-10)

(6) 『源氏物語の世界』(東大人文研究叢書、秋山虔、東京大学出版会、1964-12-25)

(7) 参考：『古典文学論考 枕草子 和歌日記』(新典社研究叢書 29、森本元子、新典社、1989-9-30)

(8) 小森潔「主要章段解説 八〇里にまかでたるに」(『枕草子大辞典』枕草子研究会、勉誠出版、2001-04-01)

(9) 岡山美樹「主要章段解説 一二七・一二八 二月、官の司に」(『枕草子大辞典』枕草子研究会、勉誠出版、2001-04-01)

(10) 一二二段・一五四段では斉信が「宰相」と表記されているが、斉信の参議任官は長徳二年四月二十四日であるため『枕草子』に描かれている事件の年時と食い違う。作者の記憶違いだとする説(川合洋之「主要章段解説 一二三 はしたなきもの 八幡の行幸」(『枕草子大辞典』枕草子研究会、勉誠出版、2001-04-01)、あえて宰相と表記することで決別の意思表示をしたとする説(『歴史読み 枕草子 清少納言の挑戦状』(赤間恵都子、三省堂、2013-03-31))等があるが、いずれにしても執筆時期は長徳二年四月以降である。

(11) 岡田潔「主要登場人物解説 藤原斉信」(『枕草子大辞典』枕草子研究会、勉誠出版、2001-04-01)

(12) 『平安朝女流作家の研究』(岡崎知子、パトルス社、1967-08-01)

(13) 容姿(態度)・朗詠についての他の描写、機智についての描写のある章

段は、次の通りである。

容姿(態度) …一二二段、一八九段

朗詠…一二八段、一五四段

機智…一五四段

- (14) 『源氏物語の世界』(東大人文研究叢書、秋山虔、東京大学出版会、1964-12-25)

- (15) 『白氏文集』卷十七「廬山草堂夜雨独宿」題「(前省略)蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中(後略)」の詩の後半を答えよ

- (16) 『史記』刺客列伝「士為知己者死、女為説己者容。(下略)」

(いいだ・ゆうか／横浜国立大学教育人間科学部卒業生)